各社の協力も得ながら「阪神・淡路大震災映像アーカイブ」事業に取り組み、そのモデル映像データベースを1998年１月末まで同協会と阪神・淡路大震災復興支援館（フェニックスプラザ）で公開する予定です。さらに、同協会では避難所を中心に資料の調査・収集や聞き取り調査などを進めており、資料の所在に関するさまざまな情報や、調査先からの積極的な反応などの成果もあがってる反面、嘱託３名の調査体制ではいかんともしがたい状況とのことです。また、さまざまな分野からの「調査公害」と言われるほどの被災地調査が行われたにもかかわらず、これらの成果を共通の土台で集約保存していく取り組みがきわめて不十分にしかなされていないなど、多くの課題が浮かび上がってきています。

史料ネットとしては、こういった状況を改善する意味も含めて、前回ニュースでは第３回「震災記録の保存と編さんに関する研究会」の開催を検討中としていましたが、具体化には至っていません。行政や市民団体などとも協力しながら、具体的な震災資料保存の取り組みを進めたいと考えています。各方面の皆さんのご協力をお願いします。

なお、この課題について全体的に問題点を整理した、佐々木和子氏（21世紀ひょうご創造協会嘱託）による報告が、全史料協会誌『記録と史料』第８号（1997年10月発行予定）に掲載される予定です。　（文責・辻川　敦）

被災地の遺跡を考える見学会

第６回、第７回の「被災地の遺跡を考える見学会」について報告します。

第６回の見学会は、神戸市兵庫区の「**上沢遺跡**」を対象に、６月３日（火）に行われました。当日は雨まじりの天候でしたが、22名の参加者を得ました。遺跡は、弥生時代から鎌倉時代にまで続く、集落跡でした。見学会には「上沢遺跡」近隣の住民の方々も数名参加されていましたが、その方々の話によれば、この遺跡のあたりの海抜は、周囲からは一段高く、阪神大水害の際にも被災を免れたとのこと。このことは、現に遺跡に立ち周囲を見渡せばすぐに了解できるものでした。さらに、発掘担当の調査員の方からは、周囲の低地では、遺跡・遺物の発見も見られないとの教示がありました。「上沢遺跡」周辺地域は、まさに住居区域として古来から好条件を備えていたということなのでしょう。今回の発掘調査は、被災地における道路拡張および区画整理にともなうものという、当見学会でははじめてのケースでした。その場合、いわゆる住宅地の「減歩」が問題になってくるのですが、調査員の方の話によるかぎり、地域住民社会との間で、この問題をめぐるやりとりはまだ起こっていないということでした。

第７回は、これも神戸市兵庫区の「**兵庫津**」**遺跡**を対象に、７月９日に行われ、40数名の参加者がありました。「兵庫津」遺跡は、以前にも「見学会」で訪れたことがあるのですが、今回も、前回同様、国道２号線沿いの共同溝敷設工事にともなう調査発掘でした。今回の現場では、中世前期の遺跡と遺物の出土があり、そのうち、遺構（公的施設かとも考えられる建物の石組み）については、残念ながら国道沿いという現場の特殊性および工期との関連で見学することはできませんでしたが（交通網の円滑な機能維持のため、調査が終わった部分については即鉄板をかぶせ、簡易車道として使用）、陶磁器（日用品が主）をはじめとする遺物は見ることができました。今回の見学会では、文献史の側から、中世～近世の兵庫津の展開をとりまとめた解説を史料ネットの側で準備したのですが（担当は中世史専攻の神戸大院生）、その内容と、現場の調査員の方からの遺物の出土状況についての説明との間に、相互補完的な一定の対応関係（史料から推定された兵庫津の発展・衰退と、出土遺物の量・出土区域についての時期的な展開の様相との関係など）があったのが印象的でした。また、「兵庫津」についての歴史的認識・理解の深まりが、より立体的になることをねらって、発掘現場の見学を終えた後、周囲の「兵庫津」関連史跡を見て歩く「ウォーキング」も組み合わせました。

（文責・井上勝博）